

## 雑感 「一関地方の『光』とは？」

住職 千坂げんぼう

過日、岩手県北上市立花地区公民館で活動している女性部から、祥雲寺で法話をして欲しいとの希望があり引き受けた。祥雲寺に到着した添乗員に聞くと、この後、健康茶で有名な精茶百年本舗に回るという。さしずめ祥雲寺で「心の健康」、百年茶で身体の健康と言ふことなのであろう。その後の行程は聞き漏らしたが、おそらくは一関温泉郷で昼食、ゆっくり温泉につかり、おしゃべりでストレスを発散させるのであろう。

このような想像をしたのは、祥雲寺女性部でも六月二日に盛岡方面に日帰り旅行をし、私が同道したからである。その日は寺庭の都合が悪かったので、久しぶりに三十数名のお姉様方にお付き合いました。午前中は盛岡で五百羅漢の報恩寺（曹洞宗）、南部家の墓地



小岩井農場の一本桜と岩手山を背景に

（臨済宗妙心寺派・聖壽寺<sup>しょうじゆ</sup>）の参拝。これらは私が相談を受けて推奨した所である。その後、雫石にある温泉で昼食、入浴となったが、その昼食の豪華さに驚いた。

結婚式などのコース料理と見まがう食事でも、とても全部は食べきれない代物だったが、皆さんペロリと平らげた。どうも今回の旅行はこのご馳走と温泉が最大の目当てだったらしい。女性のストレス発散は食事、男性は酒と言われていることを改めて実感した。これらの体験は、樹木葬の里で模索している「里歩き」（フットパスといわれる）のコース設定とその際のもてなし方についてヒントを与えてくれた。（これについては近々構想を策定する）

フットパスは普通の道路ではなく、あぜ道などを歩いて自然を楽しむものでイギリスが先進地である。驚きいづみ東京大学大学院教授はイギリスのフットパスより「樹木葬の里」（久保川イーハトーブ世界）が生態系の豊かさで格段に勝っているので、素晴らしいフットパスが出来るのではないかと提言している。

一関地方の自然、文化は素晴らしいがそれを有効利用出来ていないのが現状である。須川温泉と須川岳登山、奥州藤原氏の文化遺産・金色堂：これらは人々を引きつけるものであるが、いわば出来合いの観光地というべきであり、今のままでは観光産業としての広がりを見込めない。

「観光」は中国古典の『易経』による。そこでは、「光」はそれぞれの国力（地域力）を指し、人的資源も含む。人智を重んじる儒教的思想傾向を根底に持つ中国人は、自然より文化を重視する。したがって、風光明媚な自然は「光」のほんの一つに過ぎないとする。そのため自然を軽視しがちになる。昨今の中国におけるさまざま自然破壊は、彼らの自然観の悪しき到達点と言える。

これに対し、日本人は自然に対して過度な働きをしてこなかった。そのため人間と自然との緩やかな関係が「里山」という日本の景観を作りだしてきた。八百年前の奥州藤原氏による平泉の浄土庭園づくりは、太田川、衣川、戸内川<sup>へがな</sup>と北上川との合流点が織りなす湿地環境、北上川近くまで張り出してきた磐井丘陵帯のせいで各所にしみ出す水による湿地環境の二つを上手に利用したものであった。ところが戦後、日本人は先人の作ってきた環境の素晴らしさを認識せず、便利さを追求するあまり自然へ多大な負荷を加えることに鈍感になった。池は埋められ、木々は切り倒され、河川、用水路、電柱など至るところコンクリート製のもので囲まれるようになった。現在の平泉のマチはそのような悪しき産物の典型であろう。このような状況の反省があったからこそ、久保川イーハトーブ世界は「にほんの里100選」に選定されたのである。この貴重な自然を後世に残すこと：知勝院の使命はこれに尽きると思われるのです。